

いしかわ里山塾穴水班における活動内容と成果

「穴水の自然豊かな風土が育んだ食の魅力」

団体名 いしかわ里山塾 穴水班

代表者名 水木 舜

執筆者：水木 舜

はじめに（背景・目的・目標）

石川県里山振興室新規事業である「いしかわ里山塾」では、世界農業遺産に認定されている、「能登の里山・里海」について小学校で出前授業を行い、若い世代へのふるさと教育を行うのに加えて、大学生が現状を知り情報発信をすることで、多くの人に知ってもらおうことを狙いとしている。

穴水班では穴水町の地域資源である牡蠣の有機的連鎖性について明らかにすることを目的とした。

一番の背景として、穴水町は石川県の中でも牡蠣や水産物が有名で、湾が多い地形で海と山の距離が近く、海と山の距離が近く、穴水町独自の有機的連鎖性があるため、農林水産業が発達したのではないかと考察した。

また、里山・里海の保全にあたっては、平成 25 年に「いしかわ漁民の森づくり in 穴水」という取り組みを行っている。そのことから、現在行われている保全活動についても明らかにする。

活動内容

事前調査として、7月22日に現地へ赴き周辺調査を行った。また、本調査として8月30日から9月1日、9月20日に現地調査を行った。主な訪問先として、穴水町役場、(株)のとワイン、ボラ待ち櫓(写真③)、能登中居鋳物館、渚水産、牡蠣養殖業者の道辺さんにヒアリングを行った(写真①参照)。

また、調査結果についての出前授業を1月21日に、穴水町立穴水小学校にて行った。

成果、結果の考察

穴水で牡蠣の養殖が始まったのは昭和初期と言われている。なぜ養殖が始まったかという点、穴水の

湾は年中穏やかで、深さが17~18mの鍋底型になっていて、カキを育てる環境に適していた。現在はマガキと岩ガキの二種類が養殖されている。

穴水のカキにおける有機的連鎖性については、湾の傍に広葉樹が多くその落ち葉等が海の養分となることと、田畑からの栄養分が川や用水を通じて流れ出ていたことから、穴水の湾は栄養分が豊かだったことが考えられ、そういった流れより牡蠣が成長することが分かった。



(写真①：9月20日 カキ養殖業者 道辺さんへのヒアリングでのカキ養殖の様子)

穴水の牡蠣が有名になるきっかけとして、カキ祭りが影響している。穴水でカキ祭りが始まった後に生産量が3~5倍となり、来場者数も開始当初から年々増加していった2018年ではおよそ4~5万人だった。以上のことからカキ祭りによって、「穴水といえばカキ」というイメージができたのではないかと考えられる。また、流通の幅やインフラ整備によって販路が大きく広がったというのもきっかけの一つである。それに、機械の導入による作業効率の向上もあり、カキの生産にあたる労力が大きく減ったのも要因だといえる。

穴水町は、牡蠣によって有名になっただけでなく、牡蠣殻をのとワインの畑で肥料として使う等、牡蠣が水産業だけでなく穴水の多種にわたる産業を支えていることが分かった。そういった点で考えると穴

水町において牡蠣は重要な地域資源と考えられ、様々なつながりを生んでいると推察される。

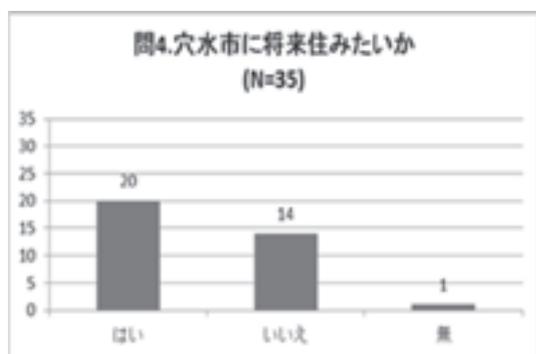
スローツーリズムについては市が推進し「スローツーリズム穴水町」というプログラムでプラン立てをして観光客にアピールしている。単に大手のホテルや旅館に宿泊するのではなく、農家民宿や民泊を利用し、地域の特産品や観光名所に行き、様々な自然体験をするということを目的としている。

出前授業においては、カキの有機的連鎖性やスローツーリズムについて分かりやすく、小学生に伝えるために紙人形劇で出前授業を行った（写真②）。



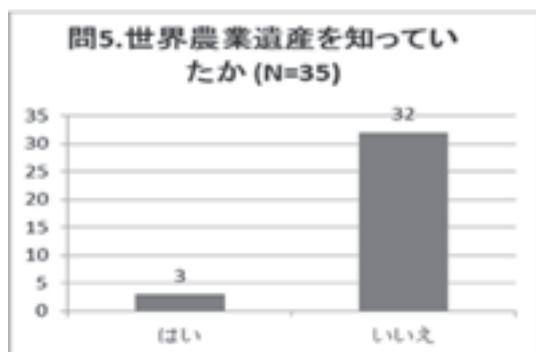
（写真②：1月21日 穴水小学校にて）

また、その際に小学生へアンケートを取って集計した結果、次のことが分かった。



（図①：小学生へのアンケートより執筆者作成）

上記の図①より将来穴水に住みたいと思っている人は全体の三分の二程度であり、将来住まないかも



しれないと思っている人の理由としては、他の地域に住んでから考えたいという意見や将来なりたい職業が穴水ではできないからという意見があった。

（図②：小学生へのアンケートより執筆者作成）

また、図②より、世界農業遺産を知っている人の割合は少なかった。それに、小学生への世界農業遺産について冊子の配布等はあるにもかかわらず、知名度が低いことも分かり、今後の課題であると考えられる。

しかし、世界農業遺産になって嬉しい、や世界や日本の中でも数少ない一つに選ばれているのはすごいといった世界農業遺産に認定されたことを喜ばしく思う意見が多々あった。

今後の課題、展望

穴水町の課題として、PR力や情報発信力が足りないと考えられる。なぜなら、産業や観光政策などに行政が様々な取り組みをしている一方、なかなか認知されていないという現状が分かったためだ。それに、少子高齢化や水産業に携わる人が年々減っているという現実を知ることができ、将来的な牡蠣養殖だけでなく、里山や里海の保全が難しくなってくると考察できる。このことを改善するために、行政だけでなく学生側も情報発信に努めることで幅広い世代に世界農業遺産や里山里海について理解してもらえようと考えられる。

小学校での出前授業では、能登の里山と里海や世界農業遺産について知ってもらうことができた。また、小学生への出前授業を通じて大学生側も、どう伝えることで多くの人へ認知されるかを知ることができた。



（写真③：8/30 ボラ待ち檣前にて）